

## 体育専攻学生における泳力と原因帰属、有能感、不安感の関連

——性差の比較から——

三宅 信花\*・益川 満治\*\*・西條 修光\*

(2003 年 10 月 24 日受付, 2004 年 2 月 13 日受理)

## Relationship among Swimming Ability, Attributional Style, Physical Competence and Anxiety in Students of Physical Education

——From Sex Difference——

Nobuka MIYAKE, Mitsuharu MASUKAWA and Osamitsu SAIJO

The purpose of this study was to examine relation between swimming ability and psychological factors that were attributional style, physical competence and anxiety. Moreover, it was tried to find out that there was psychological difference between male and female.

The results were as follows:

- 1) In female, there were significant difference between the group which was able to swim and the group which was not able to swim in "difficulty" in positive and negative situation.
- 2) In male and female, the score of the group which was able to swim was higher than the score of the group which was not able to swim in "physical competence", and the score of the group which was not able to swim was higher than the group which was able to swim in "anxiety" and "dislike feeling". There was significant difference respectively.
- 3) The relation of cause and effect between swimming ability and psychological factors were examined by path analysis. As result, swimming ability was influenced by attributional style, physical competence and anxiety, which mean is that the model of psychological factors to define swimming ability was validity.

In conclusion, it is important for the leaders to intervene learner's attributional style and physical competence when they teach swimming.

**Key words:** Swimming ability, Students of physical education, Sexual differences, Attributional style, Physical competence, Anxiety

**キーワード:** 泳力, 体育専攻学生, 性差, 原因帰属, 有能感, 不安

### I. はじめに

同じように学習経験がありながら, どうして泳げる人と泳げない人がいるのだろうか。この問題の解明は水泳指導の基本的な課題である。

Whiting<sup>1)</sup> は, 「かなづち」(persistent non-swim-

mer) を「過去に一定期間水泳指導を受けたことがあるにもかかわらず, まだ泳げない人たち」と定義し, 学習経験があっても泳げない人には特別な心理的要因のあることを指摘している。水泳学習と心理的要因の関連についての研究には, Whiting<sup>1)</sup>, 滝

\* 体育心理学研究室, \*\* 大学院トレーニング科学系院生

ら<sup>2,3)</sup>、岡本ら<sup>4)</sup>のものがある。Whiting<sup>1)</sup>は水泳学習経験がありながら泳げない人は内向的で神経症的傾向が高いことを明らかにしている。しかしながら、Whitingの研究は、学習者の心理的特性をみたものであって、泳ぎを習得する際の情緒的な問題についてはふれていない。この点について、滝ら<sup>2,3)</sup>は小学生の水泳学習前後の意識変容をみたところ、学習経験をするなかで、不安感や嫌悪感は減少し、水泳に対する積極的な意欲の向上がみられること、岡本ら<sup>4)</sup>は体育専攻学生における遠泳と不安の関連をみたところ、遠泳落伍者は完泳者に比して遠泳前の状態不安が高いことを報告している。

筆者ら<sup>5)</sup>は、本研究に当たってあらかじめ、全く泳げない体育専攻学生を対象に、「なぜ、泳げないのか」の原因について聞き取り調査を行った。聴取した回答についてKJ法<sup>6)</sup>を用いて分類したところ、泳げない原因として「水が怖い」「水に顔がつけられない」「過去におぼれた経験がある」などの不安や恐怖心だけでなく、「諦めが早い」「泳げないと決めつけている」「筋肉がついていて重いから」「教え方が下手だったから」といった、学習意欲とくに運動に対する有能感や、原因帰属との関わりを予想させるものであった。筆者ら<sup>7)</sup>は、この予想を裏づけるために、女子体育専攻学生を対象に調査を行った。泳力と原因帰属、有能感そして不安感の関連をみたところ、泳げない群の方が泳げる群よりも、水泳学習は難しい課題と感じ、有能感が低く、不安感が高いというものであった。

ところで、西田や伊藤らは水泳ではないが体育の授業やスポーツ行動と原因帰属および運動有能感の関連をみている。その結果、運動有能感<sup>8,9)</sup>や自己の能力評価<sup>10)</sup>が男子の方で女子より高く、正事態（運動ができたとしたら）での原因を男子で能力、女子で努力帰属、負事態（運動ができなかったとしたら）では男子で指導者、女子で能力や課題の困難度に帰属させること、また不安感<sup>11)</sup>についても女子の方が男子よりも高く、性差のあることが報告されている。

そこで、本研究では、体育専攻学生における泳力と心理的要因、とくに原因帰属や有能感、不安との関わりに、性差がみられるかを検討することにした。

## II. 方 法

### 1) 調査期日

2002年10月から2003年4月にかけて行った。

### 2) 調査対象

N体育大学3年生757名（男子481名、女子276名）のうち無効回答36名を除く、721名を調査対象（有効回答率95.2%）とした。以下の分析は、「学習経験があっても泳げない人には特別な心理的要因がある」というWhiting<sup>1)</sup>の指摘をふまえ、水泳学習経験の多い群485名（男子313名、女子172名）を対象として行った。ここでいう水泳学習経験とは、幼稚園や保育園から大学までの各学校段階（5段階）で水遊びや水泳の授業があったことを意味し、1回と2回を「少ない」、3回を「普通」、4回と5回を「多い」群とした。なお、各学校段階での経験を1回として数えているのは、対象者が小学校の何学年で授業があったかを、記憶していないことが多いので、大まかではあるがこのような数え方をした。

多い群について、これまでの先行研究を参考に<sup>12,13)</sup>、泳力が100m未満を「泳げない」群（男子43名、女子50名）、100m以上を「泳げる」群（男子270名、女子122名）の2群に分けた。なお、ここでの泳力とは持続泳（泳法は自由で、途中で立たないでターンを繰り返す、呼吸を規則的に行いながら泳ぐこと）での距離とした。

### 3) 実施方法

調査は大学での授業終了後に質問用紙を配布、説明、回収するといった集合法で行った。

### 4) 調査内容（添付資料）

#### ①フェイスシート

性別、スポーツ歴、泳ぐ距離に関する自己評価、水泳学習経験等を記入させた。

#### ②原因帰属様式について

質問項目は伊藤の研究<sup>10)</sup>を参考に作成した。内容は、水泳の学習場面における正、負の原因帰属事態（正事態：水泳ができたとしたら、負事態：水泳ができなかったとしたら）について、それを引き起こすと考えられる原因（帰属因）を能力、努力、課題の困難度、運、指導者とし、自分にそのような事態が起こったと仮定し、各帰属因がどの程度自分にあてはまるかを回答させた。なお、質問項目は正、負の原因帰属事態×帰属因の計10項目であった。回答

の形式は、「かなりそう思う…5点」から「全くそう思わない…1点」とする5件法であった。

### ③有能感と不安について

岡沢ら<sup>9)</sup>、伊藤<sup>14)</sup>、滝ら<sup>3)</sup>の研究や予備調査の結果を参考に、水泳学習場面の有能感と不安の2要因に関係する質問項目を作成した。水泳に対する有能感要因は、身体的有能さ（他者との比較からくる、自己の水泳に対する身体的能力を認知する水準）と統制感（自己の努力や練習によって、結果をどの程度コントロールできると認知する水準）の各下位尺度について4項目ずつ、水泳に対する不安要因は不安感（浮力や抵抗などの水の物理的作用から生じる不安感）と嫌悪感（呼吸などの水の生理的作用から生じる嫌悪感）の各下位尺度について5項目ずつの合計18項目であった。回答の形式は、各質問項目が自分にどの程度あてはまるかについて、「よくあてはまる…5点」から「全くあてはまらない…1点」とする5件法であった。

### 5) 統計処理

すべてのデータ処理は、SPSS 11.0J for Windowsを用いて行った。統計処理は、危険率5%未満をもって有意水準とした。

## III. 結 果

### 1) 泳力と原因帰属様式の関連について

図1～4は男女それぞれ泳力別に水泳学習での原因帰属様式の正、負事態別平均得点を示したものである。 $t$ 検定の結果、男子では正、負事態いずれの帰属因においても有意な差がみられなかった。女子では正、負事態いずれも「課題の困難度」( $t = -1.991$ ,

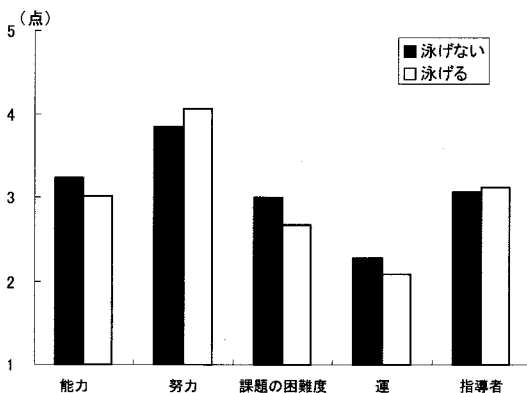


図1 泳力別にみた正事態での原因帰属得点 (男子)

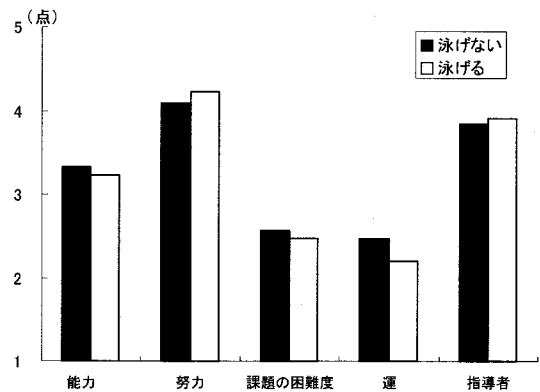


図2 泳力別にみた負事態での原因帰属得点 (男子)

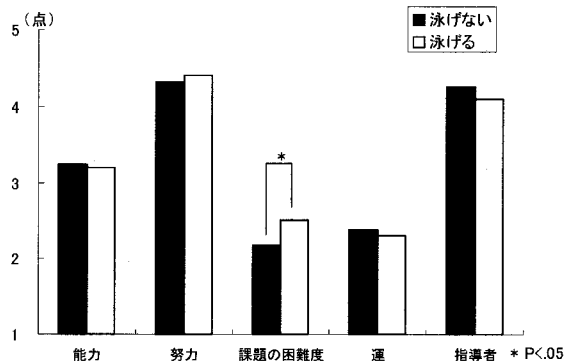


図3 泳力別にみた正事態での原因帰属得点 (女子) \*  $P < 0.05$

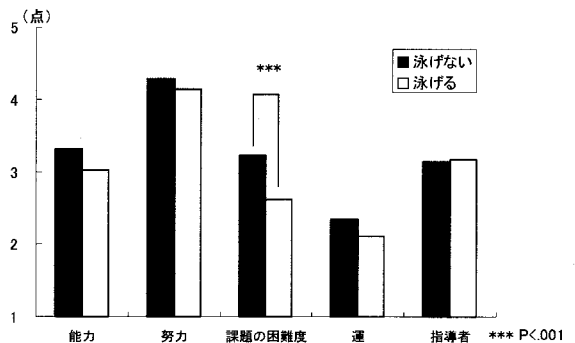


図4 泳力別にみた負事態での原因帰属得点 (女子) \*\*\*  $P < 0.001$

$p < 0.5$ ,  $t = 3.589$ ,  $p < 0.01$ ,  $df = 170$ ) の帰属因において群間で有意な差がみられた。これらの結果から、女子では泳力のない者はある者に比べて、泳げない原因を水泳は難しいからと感じていることがわかる。

### 2) 泳力と有能感、不安要因の関連について

図5, 6は泳力別に有能感、不安要因の各尺度の平均得点を示したものである。男子では $t$ 検定の結

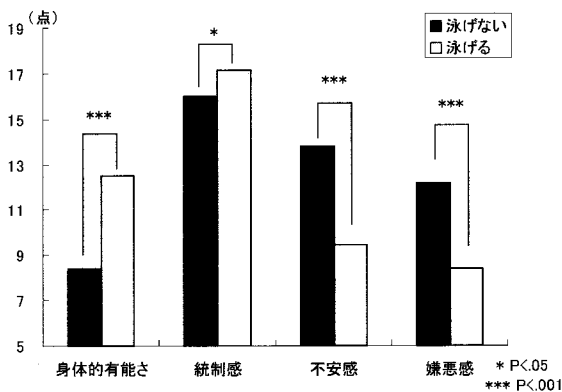


図5 泳力別にみた水泳に対する有能感要因, 不安要因の平均得点 (男子)

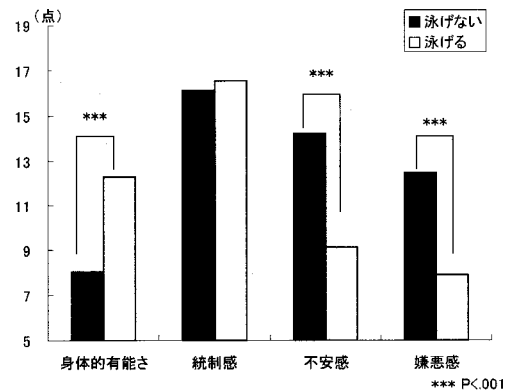


図6 泳力別にみた水泳に対する有能感要因, 不安要因の平均得点 (女子)

果, 有能感要因で「身体的有能さ」( $t = -6.526, p < 0.01, df = 311$ ), 「統制感」( $t = -2.365, p < 0.05, df = 311$ ) の尺度において, 不安要因で「不安感」( $t = 6.585, p < .001, df = 311$ ), 「嫌悪感」( $t = 6.280, p < .001, df = 311$ ) の尺度において群間で有意な差がみられた。女子では有能感要因で「身体的有能さ」( $t = -7.745, p < 0.01, df = 170$ ) の尺度において, 不安要因で「不安感」( $t = 7.107, p < .001, df = 170$ ), 「嫌悪感」( $t = 6.805, p < .001, df = 170$ ) の尺度において群間で有意な差がみられた。これらの結果から, 男女とも泳力のない者はある者に比して, 水泳に対する有能感がもてず, 不安感や嫌悪感の高いことがわかる。

### 3) パス解析の結果について

これまでの結果をもとにして, 男女別に泳力を規定する心理的要因についての因果関係モデルの検討を探索的に行った。ここでは, 水泳学習における原因帰属様式→有能感要因→不安要因→泳力という流れを想定して, 原因帰属様式(能力, 努力, 課題の困難度, 運, 指導者の各帰属因)を第一水準, 有能感要因(身体的有能さ, 統制感尺度)を第二水準, 不安要因(不安感, 嫌悪感尺度)を第三水準とし順次, 重回帰分析を行った。以上の分析の結果, 得られた有意なパスを取り上げ, 泳力を規定するパスダイアグラムを作成した(図7, 8)。

有意なパス係数を見ると, 原因帰属様式と有能感要因の間では, 正, 負事態の「能力」(以下正, 負—能力), 「課題の困難度」(以下正, 負—課題)が「身

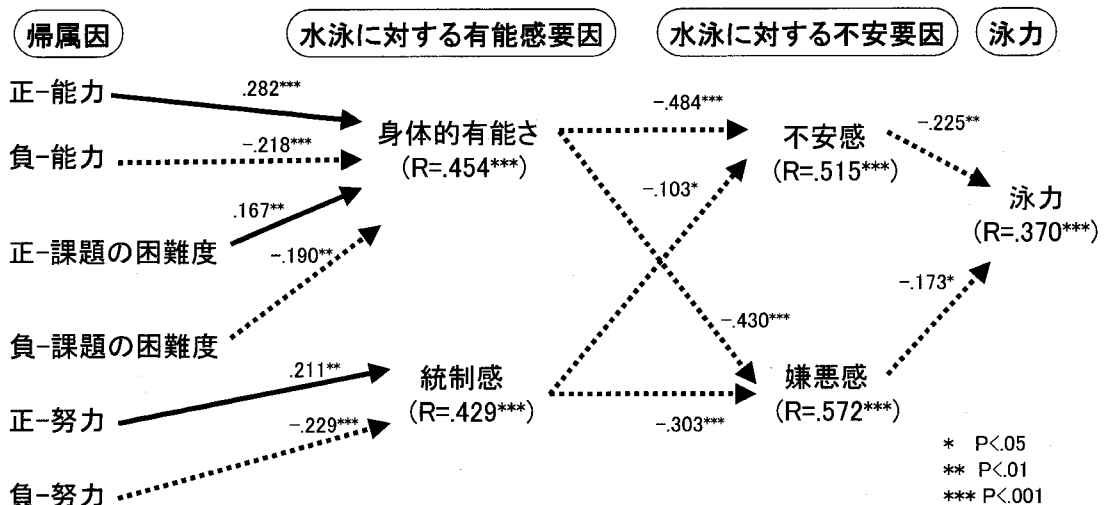


図7 泳力を規定する心理的要因のパスダイアグラム (男子)

注: 有意なパスのみ示す。実線矢印は正のパス, 破線矢印は負のパスを示す。

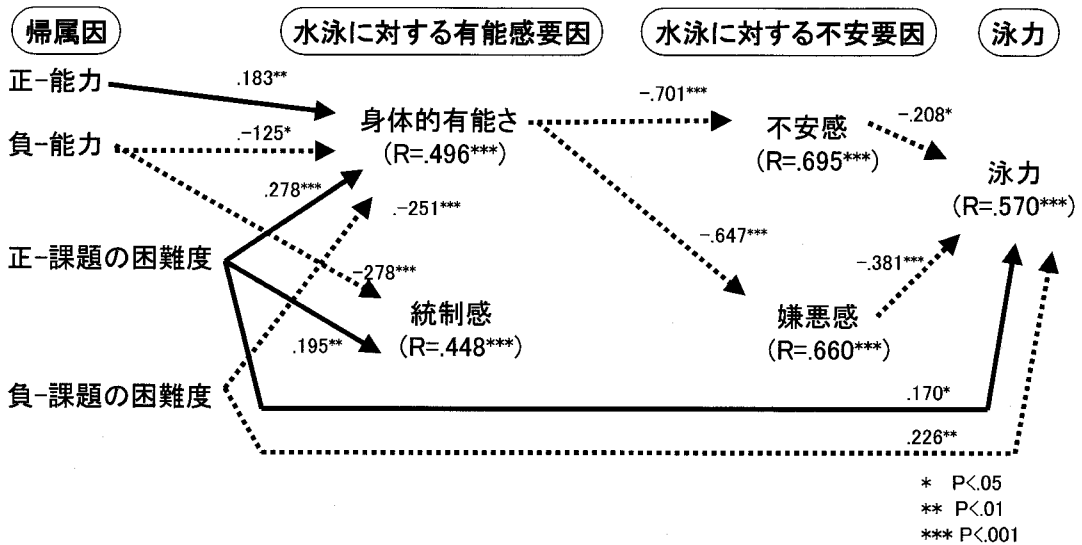


図 8 泳力を規定する心理的要因のパスダイアグラム (女子)  
注: 有意なパスのみ示す。実線矢印は正のパス、破線矢印は負のパスを示す。

体的有能さ」に有意な正、負のパスが示された。そして、男子では正、負事態の「努力」(以下正、負-努力)が「統制感」に有意な正、負のパス、女子では「正-課題」と「負-能力」が「統制感」にそれぞれ有意な正、負のパスを示した。

有能感要因と不安要因の間では、男女とも「身体的有能さ」が「不安感」「嫌悪感」に有意な負のパスを示した。そして男子では「統制感」と「不安感」「嫌悪感」においても同じパスが示された。

不安要因と泳力の間では、男女とも「不安感」と「嫌悪感」が泳力にそれぞれ有意な負のパスが示された。

そして女子では、「正、負-課題」が泳力にそれぞれ有意な正、負の直接効果を及ぼした。

#### IV. 考 察

1) 泳力と原因帰属様式および有能感要因の関連をみたところ、原因帰属様式については、女子で泳げない群は泳げる群に比して、泳げない原因を「課題の困難度」としていたが、男子ではこのような関連はみられなかった。有能感要因については、男女とも泳げない群で「身体的有能さ」が泳げる群に比して有意に低かった。このことから、女子は男子に比べて、泳げない人は努力してもうまくないという経験を積み重ねる中で、身体的な能力についての自己評価が低下し、自己コントロールのできない

外的要因である「課題の困難度」<sup>10, 14)</sup>に帰属させるようになったのではと考えられる。

泳力と不安要因の関連については、男女ともに泳げない群ほど、「不安感」や「嫌悪感」が高かった。小学生での遠泳体験と不安感の関連をみた研究<sup>3)</sup>によると、遠泳の完泳群では遠泳後に不安が低下したと報告している。したがって、不安感という漠然とした水泳に対する恐れは、泳げるという体験の中で変化していくことが示唆される。本研究での泳げない人は成人であり、これまでの幼児期からの水泳学習の中で失敗体験を積み重ね、水泳に対する不安感や嫌悪感を高めていったものと考えられる。

2) 泳力と原因帰属様式、有能感要因、不安要因の因果関係について、男女それぞれパス解析によって探索的に検討した。

男女で共通していた点は、正、負事態の原因を「能力」や「課題の困難度」に帰属するという帰属様式は、「身体的有能さ」の認知に影響し、「身体的有能さ」の認知は「不安感」や「嫌悪感」に影響し、さらに泳力に影響するという流れのあることが示唆された。「能力」や「課題の困難度」といった安定した要因<sup>15, 16)</sup>に帰属させることは、今後も同じ結果となるのでは、という結果に対する予期を抱かせることになる。このことが、「正-能力」や「正-課題」が「身体的有能さ」に正の、「負-能力」が「身体的有能さ」の評価に負の影響を与えたと考えられる。

有能感要因と不安要因の間では、男女ともに「身体的有能さ」尺度と、「不安感」「嫌悪感」尺度で有意な負の関係が認められた。このことから、水泳に対する身体的有能さを高く認知したときには、不安感や嫌悪感を低下させ、泳力に影響していると考えられる。水泳指導では、不安感や嫌悪感の除去<sup>12, 17)</sup>が必要とされるが、本研究でもこのような指導の必要性を裏づけるという結果であった。

3) パス解析の結果で、有能感要因の「統制感」尺度において原因帰属様式や不安要因への影響の仕方に性差がみられた。すなわち、男子では努力帰属が「統制感」を高め、「不安感」や「嫌悪感」を軽減していたが、女子ではこのような関連がみられなかった。

男子は自己の能力評価が女子に比して高いと言われている<sup>10)</sup>。努力要因は、不安定な要因で動機づけと関連<sup>14)</sup>が深く、自己の能力評価の高い男子では努力次第で結果がコントロールできるという「統制感」を高め、「不安感」や「嫌悪感」を軽減することになったのではと考えられる。ところが、女子は能力評価が低いため、安定した要因である「課題の困難度」<sup>10)</sup>に帰属し、水泳は難しくても結果は変わらないと認知することとなり、「統制感」を低めることにつながっていったのではないかと考えられる。

以上のパス解析の結果をまとめると、男女ともに正、負事態の原因を「能力」や「課題の困難度」に帰属するという原因帰属様式は、「身体的有能さ」の認知に影響し、「身体的有能さ」の認知は「不安感」や「嫌悪感」に影響し、さらに泳力に影響するという流れが示唆された。このことは、水泳指導場面での指導者による学習者の原因帰属様式と、身体的有能さの認知への介入の必要性を示唆するものである。

4) 本研究では泳力を規定する心理的要因として、原因帰属様式、有能感要因、不安要因というモデルを想定して、これらの因果関係を探索的に検討した。しかしながら、モデルがデータをどの程度反映しているかという適合度の吟味は行っていない。今後、モデルの妥当性の検討を行う必要がある。

また、泳力と原因帰属様式、有能感要因、不安要因との関連については、対象が体育専攻学生であったため、結果を一般化するには限界がある。西田<sup>8)</sup>、

伊藤<sup>14)</sup>はスポーツ実施の程度や運動経験年数によって、原因帰属、有能感そして不安感が異なることを報告している。今後、泳力と心理的要因の関連については、より多様な対象についての検討が必要なることを付記しておく。

## V. ま と め

本研究の目的は、体育専攻学生における泳力と原因帰属や有能感、不安との関わりに性差がみられるかを検討することであった。

N 体育大学3年生485名(男子313名、女子172名)を調査対象とした。調査方法は質問紙法で、内容は①原因帰属様式(正、負事態各5項目)、②有能感要因(身体的有能さ、統制感尺度各4項目)、③不安要因(不安感、嫌悪感尺度各5項目)であった。

結果は以下の通りであった。

- 1) 泳力と原因帰属様式との関連をみたところ、女子では正、負事態とも「課題の困難度」において、泳げる群と泳げない群の間で有意な差がみられた。
- 2) 泳力と有能感、不安要因の関連をみたところ、男女ともに、泳げない群では「身体的有能さ」が有意に低く、「不安感」「嫌悪感」が高かった。そして、男子では「統制感」において群間で有意な差がみられた。
- 3) 泳力と原因帰属様式、有能感、不安感といった心理的要因の因果関係について、男女それぞれパス解析によって探索的に検討した。男女ともに正、負事態の原因を能力や課題の困難度に帰属するという原因帰属様式は、身体的有能さの認知に影響し、身体的有能さの認知は不安感や嫌悪感に影響し、さらに泳力に影響するという流れが示唆された。

以上の結果から、水泳指導場面での指導者による学習者の原因帰属様式と、身体的有能さの認知への介入の必要性が示唆された。

## 参 考 文 献

- 1) H. T. A. Whiting: 「かなづち」の水泳指導, 泰流社, 1977.
- 2) 滝 省治, 柏原健三: 水泳学習と児童の意識変容—水泳シーズン前後の比較—, 大阪体育学研究, 5, 30-40, 1987.
- 3) 滝 省治, 柏原健三, 船越正康: 遠泳について

- ての因子分析的研究—「水への適応」調査票からみた児童の意識変化—, 大阪教育大学紀要第IV部門, **30**(1・2), 25-35, 1981.
- 4) 岡本浩子, 小早川ゆり, 大坪敏郎, 浜田元輔, 小田敏彰, 清原伸彦, 圓 吉夫: 遠泳落伍者の状態—特性不安に関する研究, 日本体育大学紀要, **19**(1), 35-45, 1989.
  - 5) 三宅信花: 大学体育専攻生における水泳学習での泳力を規定する心理的要因, 日本体育大学大学院修士論文, 2003.
  - 6) 川喜田二郎: 問題解決学—KJ法ワークブック, 講談社, 1976.
  - 7) 三宅信花, 益川満治, 西條修光: 水泳学習での泳力規定する心理的要因—大学女子体育専攻生の場合—, 東京体育学研究, 2003年度報告, 25-30, 2003.
  - 8) 西田 保: 体育における学習意欲検査 (AM-PET) の標準化に関する研究—達成動機づけ論的アプローチ—, 体育学研究, **34**(1), 45-62, 1989.
  - 9) 岡沢祥訓, 北真佐美, 諏訪祐一郎: 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究, スポーツ教育学研究, **16**(2), 145-155, 1996.
  - 10) 伊藤豊彦: スポーツにおける原因帰属様式の因子構造とその特質, 体育学研究, **30**(2), 153-160, 1985.
  - 11) 日本版 STAI 使用手引き, 三京房, 1991.
  - 12) 日高敬児: 自発的な水泳の学習のための教師の指導性, 学校体育, **5**, 22-25, 1992.
  - 13) 日本体育大学 syllabus 1, 2003.
  - 14) 伊藤豊彦: 原因帰属様式と身体的有能さの認知がスポーツ行動に及ぼす影響—スポーツ行動に関する原因帰属モデルの検討—, 体育学研究, **31**(4), 263-271, 1987.
  - 15) 伊藤豊彦: 運動パフォーマンスにおける成功・失敗の原因帰属に関する研究, 体育学研究, **25**(2), 105-111, 1980.
  - 16) 伊藤豊彦: 勝敗の原因帰属に関する研究, スポーツ心理学研究, **9**(1), 21-32, 1982.
  - 17) 財団法人日本水泳連盟編: 水泳指導教本, 大修館書店, 2002.

## 添付資料

## &lt;アンケート調査のお願い&gt;

日本体育大学体育心理学研究室

西條 修光

三宅 信花

このアンケートは水泳学習について調べるものです。アンケートの調査結果は、統計的に処理するのみで今回の研究以外の目的で使用されることはありませんので安心してご回答下さい。

以下の各設問に関し、当てはまる回答番号を一つだけ選んで○を、自由回答欄の場合は回答をご記入下さい。

## I

1. 学年、性別と出身地を記入して下さい。

学年 \_\_\_\_\_ 性別 男・女 \_\_\_\_\_ 出身地 \_\_\_\_\_

2. あなたは学内外のスポーツ関係のクラブ(サークル、同好会を含む)に所属していますか？

1. はい                      2. いいえ

3. あなたのこれまでやってきた、競技・スポーツ名を記入して下さい。
- 
- (複数ある場合は主としてやっていたものを、やっていない場合はなしと記入して下さい。)

中学	高校	大学

4. あなたの現在の泳力(持続泳)について、当てはまる回答番号を一つだけ選んで○をつけて下さい。
- 
- (泳法は自由)

※持続泳とは、途中で立たないでターンを繰り返しながら、また呼吸を規則的に行いながらゆっくりと泳ぐことです。

1. 0～5m未満                      2. 5～25m未満                      3. 25～50m未満
4. 50～100m未満                      5. 100m以上

5. あなたの水泳学習経験(水泳を教えてもらった)の有無について、それぞれ各年齢段階について○をつけて下さい。

年齢段階	幼児期	小学校	中学校	高校	大学
有/無	有/無	有/無	有/無	有/無	有/無
学校での水泳の授業は？	有/無	有/無	有/無	有/無	有/無

## II

以下の各設問は、練習しているときに仮に上手くできたり、上手くできないことがあるとするとその原因をどうとらえるかをみるものです。あなたの考えに最もあてはまると思うものに○をつけて下さい。

- 1-1 自分の専門とするスポーツにおいて技術の習得が上手くできたとしたら、なぜできたと思いますか？

	かなり そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
1. もともと能力があるから.....	5	4	3	2	1
2. 努力(練習)したから.....	5	4	3	2	1
3. そのスポーツは簡単だったから.....	5	4	3	2	1
4. 運がよかった、たまたまできた.....	5	4	3	2	1
5. 指導者の教え方が良かったから.....	5	4	3	2	1

- 1-2 自分の専門とするスポーツにおいて技術の習得が上手くできなかったとしたら、なぜできなかったと思いますか？

	かなり そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
1. もともと能力がないから.....	5	4	3	2	1
2. 努力(練習)しなかったから.....	5	4	3	2	1
3. そのスポーツは難しかったから.....	5	4	3	2	1
4. 運が悪かった、たまたま出来なかった.....	5	4	3	2	1
5. 指導者の教え方が悪かったから.....	5	4	3	2	1

次のページへ進んで下さい。 →



2-1 水泳において技術の習得が上手くできたとしたら、なぜできたと思いますか？

	かなり そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
1. もともと能力があるから.....	5	4	3	2	1
2. 努力(練習)したから.....	5	4	3	2	1
3. そのスポーツは簡単だったから.....	5	4	3	2	1
4. 運がよかった、たまたまできた.....	5	4	3	2	1
5. 指導者の教え方が良かったから.....	5	4	3	2	1

2-2 水泳において技術の習得が上手くできなかったとしたら、なぜできなかったと思いますか？

	かなり そう思う	やや そう思う	どちらとも いえない	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
1. もともと能力がないから.....	5	4	3	2	1
2. 努力(練習)しなかったから.....	5	4	3	2	1
3. そのスポーツは難しかったから.....	5	4	3	2	1
4. 運が悪かった、たまたま出来なかった.....	5	4	3	2	1
5. 指導者の教え方が悪かったから.....	5	4	3	2	1

Ⅲ 以下の各設問に関し、水泳場面においてそれぞれ当てはまる回答番号をひとつだけ選んで○をつけて下さい。

	全く あては まらな い	やや あては まらな い	ど ち ら と も い え な い	やや あては ま る	よ く あて は ま る
1 水泳の能力がすぐれていると思う	1	2	3	4	5
2 練習すれば必ず技術や記録は伸びると思う	1	2	3	4	5
3 水の中でひっくり返るのが怖い	1	2	3	4	5
4 水の中で目を開けるのは苦手である	1	2	3	4	5
5 たいていの種目(水泳の)は上手にできる	1	2	3	4	5
6 努力さえすれば水泳は出来ると思う	1	2	3	4	5
7 水の中では溺れやしないかと心配である	1	2	3	4	5
8 水の中では、沈んでいくような気がする	1	2	3	4	5
9 水泳について自信を持っているほうである	1	2	3	4	5
10 水泳ができなくてもあきらめないで、練習すれば出来るようになると思う	1	2	3	4	5
11 水の中では、息がしにくく不安である	1	2	3	4	5
12 水の中に頭をつけるのが嫌だ	1	2	3	4	5
13 水泳が初めてでもうまく出来る自信がある	1	2	3	4	5
14 水泳が自分にとって少し難しくても、努力すれば出来ると思う	1	2	3	4	5
15 水の中では息を吐き出すのが不安である	1	2	3	4	5
16 水を飲むのが辛いので水泳は嫌だ	1	2	3	4	5
17 足のつかない所で泳ぐのは不安である	1	2	3	4	5
18 息がしにくいので水泳は嫌だ	1	2	3	4	5

以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。